

共同研究 ● 宇宙開発に関する文化人類学からの接近 (2015-2018 年度)

本共同研究の目的は、宇宙開発を対象にした人類学的研究の可能性を探り、「先端科学技術の人類学」という新しいテーマに接近するための方法論を検討することにある。20世紀後半から宇宙開発に関わる科学技術が進展し、宇宙空間の利用が本格化する。それにつれて、宇宙空間はたんに科学技術の研究対象に留まるだけでなく、国際的に展開する政治的かつ経済的な動向、あるいは、ローカルな社会の生活文化とも密接に関わる問題領域となりつつある。本研究は、現代の人類学が宇宙にいかに関与できるかという実験的試みを行うプロジェクトである。

### 宇宙人類学の挑戦

人類学が宇宙を視野に入れるのは、実は新しいものではない。初代国立民族学博物館館長の梅棹忠夫は、2003年に世界

宇宙飛行士会議において人類学・民族学の立場から基調講演を行っている。こうした流れを踏まえた上で、私たちは2012年に、日本文化人類学会の課題研究懇談会のひとつとして「宇宙人類学研究会」の活動を開始した。海外でも宇宙に特化した研究領域は、まだ確立しておらず、本研究懇談



宇宙に浮かぶ地球。©NASA

会が提唱した「宇宙人類学」(Space Anthropology)は、宇宙を対象とした人類学的研究の先駆けになったと言えるだろう。そして、2014年にこの懇談会のメンバーが中心となって執筆した『宇宙人類学の挑戦——人類の未来を問う』(岡田浩樹・木村大治・大村敬一編 2014)は、「宇宙人類学研究会」の研究活動の成果であり、本共同研究会の出発点となっている。

その序文で、大村敬一はアポロ計画で撮影された写真「The Blue marble」(青いビー玉)をめぐるエピソードを紹介している。

星々が瞬く漆黒の宇宙にぽつんと浮かぶ青い地球。そこには国境もなく、ただ寂しげに、しかし、豊かな生命の営みを感じさせる一つの閉じた世界としての球がある。広大な宇宙の深淵の前にした小さな地球のはかなさを感じさせると同時に、国家も人種も、あるいは生物種の違いもなく、多様な生命がそのはかない球に暮らしている、あるいは暮らしていかなければならないということが、一目で切実に感じ取られる(大村 2014: 4-5)

大村の指摘したように、この写真は、後に環境保護団体のシンボルとして多用され、「たったひとつのかけがえない地球」といったスローガンが生み出され、国境は人為的に設定された境界にすぎない、という考えを広めた。それは現代の「世界観」に大きな影響を与えただけではなく、その後のグローバル化のイメージの根幹にも関わっている。

人類が宇宙に進出してから、すでに半世紀が経過した。1969年の月面への着陸、無人衛星、探査機による科学的調査など、宇宙は先端科学技術の集積であり、革新を促す「科学的」フィールドであった。現在では火星有人飛行すら技術的に可能であるだけでなく、人工衛星の商業利用や宇宙旅行も現実のものとなろうとしている。同時に、人工衛星を用いたGPS(全地球測位システム)、インターネット、テレビ放送など、私たちの日常生活は地球周回上に張り巡らされた衛星のネットワークなくしてはありえないほど、宇宙開発との関係を深めている。

宇宙人類学は、こうした現代社会(人類)と宇宙との関わりにおいて、「クオ・バディス・アントロポス」(人類よ、どこに行きたもう)という挑戦的な問いかけを人類学の立場から投げかけようとするものである。つまり、人類学のみならず、すべての人文社会科学の根本にある「私たちはどこから来たのか、どこにいるのか、どこへ行こうとしているのか」という問いを出発点に置く。

### 「宇宙」は人類学者のフィールドなのか？

一方で、この50年近くの間、宇宙開発に関する人文・社会科学的な立場からの研究、とくに日本の文化人類学においては、近年にいたるまでほとんどされてこなかったと言えよう。これは「宇宙」のイメージが、人類学者が伝統的にフィールドにしてきた諸社会とあまりにもかけはなれているというある種の「先入観」があったためであろう。また、文化人類学は人類の営みすべてを対象とする研究分野である、という説明からは、人間の居住に適さない、もしくは人間が長期に居住するということもなかった宇宙空間は、SFの次元に属するものとして、そもそも研究対象として見なされてこなかったからかもしれない。

しかし、人類学が対象としてきたかつての「未開社会」の人々も含めて、私たちは、先述したように、すでに日常生活のあらゆるところで多かれ少なかれ宇宙開発に関わる科学技術の恩恵を受けてるのであり、それな



超高速インターネット衛星「きずな」。©JAXA

くしては、生活が成り立たないと言っても過言ではない。また、実際に、スペースシャトルなどの宇宙船による大気圏外の飛行を行う宇宙飛行士や、国際宇宙ステーション (ISS) の登場により、宇宙空間に長期滞在する人々も現れてきているのである。

日本とは異なり、欧米ではすでにこの数年で宇宙空間の利用に関する研究が続々と現れてきている。たとえば、人類学者が

参画した欧州宇宙政策研究所 (ESPI) での共同研究の成果として、*Humans in Outer Space* という論文集が 2011 年に公開されている (Landfester eds. 2011)。また、*Lunar Settlements* という論集にも人類学者が寄稿している (Benapoya eds. 2010)。バタリーアを中心とする人類学者のグループは、2006 年に出した *E.T. Culture: Anthropology in Outerspaces* という論集で、「近代」とグローバル化という今日の問題の延長線上に、宇宙の問題を絡めている (Battaglia ed. 2006)。最近では NASA の発行するシリーズの 1 冊として、*Archaeology, Anthropology, and Interstellar Communication* が出版された (Vakoch ed. 2014)。一方ですでに宇宙空間を経験している人びとである宇宙飛行士らを対象にした研究も現れてきた。たとえば、オルセンの 2010 年にライス大学に提出した博士論文 *American Extreme: An Ethnography of Astronautical Visions and Ecologies* は、宇宙飛行士らがいかに知識、政治、社会に関する従来の考えを変革したのか、そして、それに伴って「環境」という認識をいかに共有したかを議論している (Olsen ed. 2010)。

このような状況を鑑みると、宇宙が生活世界とかけ離れた人間・文化とは無関係なフィールドと思いついてしまっているのは、もしかすると、同時代に生きる人々を想定しない伝統的な人類学者だけと言えるかもしれない。しかし、人類学は実証的なフィールドワークによって異文化を理解しようとすると同時に、同時代の人々の世界観、および文化・文明の理解を行おうとしてきたのである。本研究は、こうした人類学が本来もっていた文化・文明論的思考を、現代の科学・技術の進展によって問題となってきている「宇宙」という外部社会を想定することで、本来、人類学が備えていた文化・文明論的思考を復活させる意図もある。

### 「宇宙人類学」プロジェクト

本共同研究は、人類学が人間の営みを扱う学問分野であるという前提に立ち、今日の人類の営みが宇宙というフィールドに見いだされる点に注目する。つまり、現代社会・文化の特徴的な諸断面は、宇宙開発、および宇宙に関連する諸現象に現れており、これについての人類学からのアプローチを試みる。

その際に、三つの視点を設定する。第一に、グローバル化という現在進行中の歴史現象の延長線上に宇宙開発の問題をとらえ、宇宙開発を支える世界観を「近代」や「ポスト近代」の問題と関係づけながら、「近代」を超える可能性を探るといった視点である。第二に、人類学がこれまで培ってきた方法論や概念装置が、宇宙という新たな問題領域において有効性を



町工場の職人技から先端技術研究までが結集された H2A ロケットの打ち上げ。©JAXA

発揮できるかどうかを検討する視点である、そして第三に、宇宙開発によって人類の多様性がいかに進展しうるか、その可能性について、これまでの人類学的手法を用いて考察する視点である。

本共同研究は、大きく二つのセクションに分けて宇宙人類学を進める予定である。

第一のセクションは、宇宙をフィールドとして具体的に考え

られるテーマの検討である。たとえば、(1) 衣食住といった生活文化の宇宙環境への適応と変容、(2) 宇宙空間における人間の身体的適応、(3) 宇宙への進出や移住における文化的基盤、(4) 宇宙開発がもたらす認識の変化、および、新しい宗教や世界観の生成、(5) 巨大先端科学技術とこれを支える社会・文化システムなど、多様なテーマが想定できる。それらについて、国際法学、哲学、経済学などの人文社会科学系研究者だけでなく、宇宙物理学、生物学、医学など、自然科学系も含めた研究者を交え、議論の発展をはかっていく。

第二のセクションは、いわゆるラトウールに代表される「科学人類学」から宇宙開発の現場にアプローチを試みる。これは JAXA との共同研究調査プロジェクトと併行して行われ、宇宙開発技術者に対するインタビュー調査データの検討・解釈作業を行う。これによって、日本において宇宙開発技術が進展していく社会的過程や技術文化の系譜を解読し、日本の科学史における基礎資料を作成するとともに、最終的には人類学的フィールドワークをもとにして、「近代」に特徴的な技術発展を再検討し、「先端科学技術の人類学」の深化をめざしていきたい。

生活世界の拡大とともに、人類学は異文化の理解に挑み、同時代のアクチュアリティに迫ろうとしてきた。宇宙は、21 世紀に私たちが挑むべき新しい人類学的フィールドのひとつなのである。

### 【参考文献】

- Battaglia, D. (ed.) 2006. *E.T. Culture: Anthropology in Outerspaces*. Durham: Duke University Press.
- Benapoya, Haym (eds.) 2010. *Lunar Settlements*. New York: CRS Press.
- Landfester, U., Remuss, N-L., Schrogl, K-U., Worms, J-C. (eds.) 2011. *Humans in Outer Space—Interdisciplinary Perspectives*. New York: Springer.
- Olsen, V. A. (ed.) 2010. *American extreme: An ethnography of astronautical visions and ecologies*. PhD diss. Rice University.
- 大村敬一 2014 「クオ・ヴァディス・アントロポス？」岡田浩樹・木村大治・大村敬一編『宇宙人類学の挑戦：人類の未来を問う』pp. 1-24, 昭和堂。
- Vakoch, Douglas A. (ed.) 2014. *Archaeology, Anthropology, and Interstellar Communication*. National Aeronautics and Space Administration.

### おかだ ひろき

神戸大学大学院国際文化科学研究科教授。専門は文化人類学、東アジア研究。本プロジェクトに関連した論文として、「宇宙への進出に関する人文科学的アプローチの検討」『宇宙航空研究開発機構研究開発報告』(宇宙航空研究開発機構編 2012 年)、編著書として、岡田浩樹・木村大治・大村敬一編『宇宙人類学の挑戦—人類の未来を問う』(昭和堂 2014 年) などがある。